WA 9
8
2 止

WA9
8

享保五庚子年
速譽得生
七月廿七日
淺草　天嶽院

俗名
市川九藏

前姓名ハ祖忌店を帰三升
童名我讓しに嗟呼惜ゞ
世をすく去る

曉雨

蓮法実やまめも半満ゝ須弥子五郎

小汀民藏書
49.2.8
国会図
968330

享保六辛丑年

本住院圓理日了　俗名　大谷廣右衛門

二月十九日

芝金杉　正傳寺

見しせみ朕聖の役あり

蒸籠投げ人我祖とす

水國

おいろ在へ文庫なあて是谷稲荷

享保六辛丑年

禪壽院寶栄

六月廿二日

牛嶋妙玄寺

俗名

大熊宇田右衛門

倍子

豈天也哉の實盛姉幾情之

享保六辛丑年

常信院了體

八月廿三日

三田藥王寺

俗名 金澤平六

神奇秋初茄子如[illegible]

五山

享保六辛丑年

艶月院浄慶

九月十七日

下谷 常在寺

俗名 水木竹十郎

渕明の徑も藝の発明也

ぬりまきて

來川

盧きく 菊 松竹十郎三ツ鬘

享保八癸卯年
清山
正月廿五日

下谷
常在寺

俗名
久松友右衛門

楓晩

一枝哉籠みたすごの矢筈ゟ

享保八癸卯年

直到是心

二月廿五日　深川雲光院中　常龍院

俗名　古宮崎十四郎

今ハ昔之深成郎ニて其祖郎
阿里ヨリ堂ニ悲小山ニ小並ひ
来るをのありきしし花ゑ木男に
成てハ名を十四郎とそよへる

三升

梅干やしきも新橋の伽羅乃様

享保八癸卯年

覺譽理頓

三月十七日

俗名

中川半三郎

淺草光感寺中

栄林院

半三郎小うゝ丸名は里沖中川

息長川とをあ結を

桃朝

梁乃ちつまり花や鳴乃息

享保九甲辰年

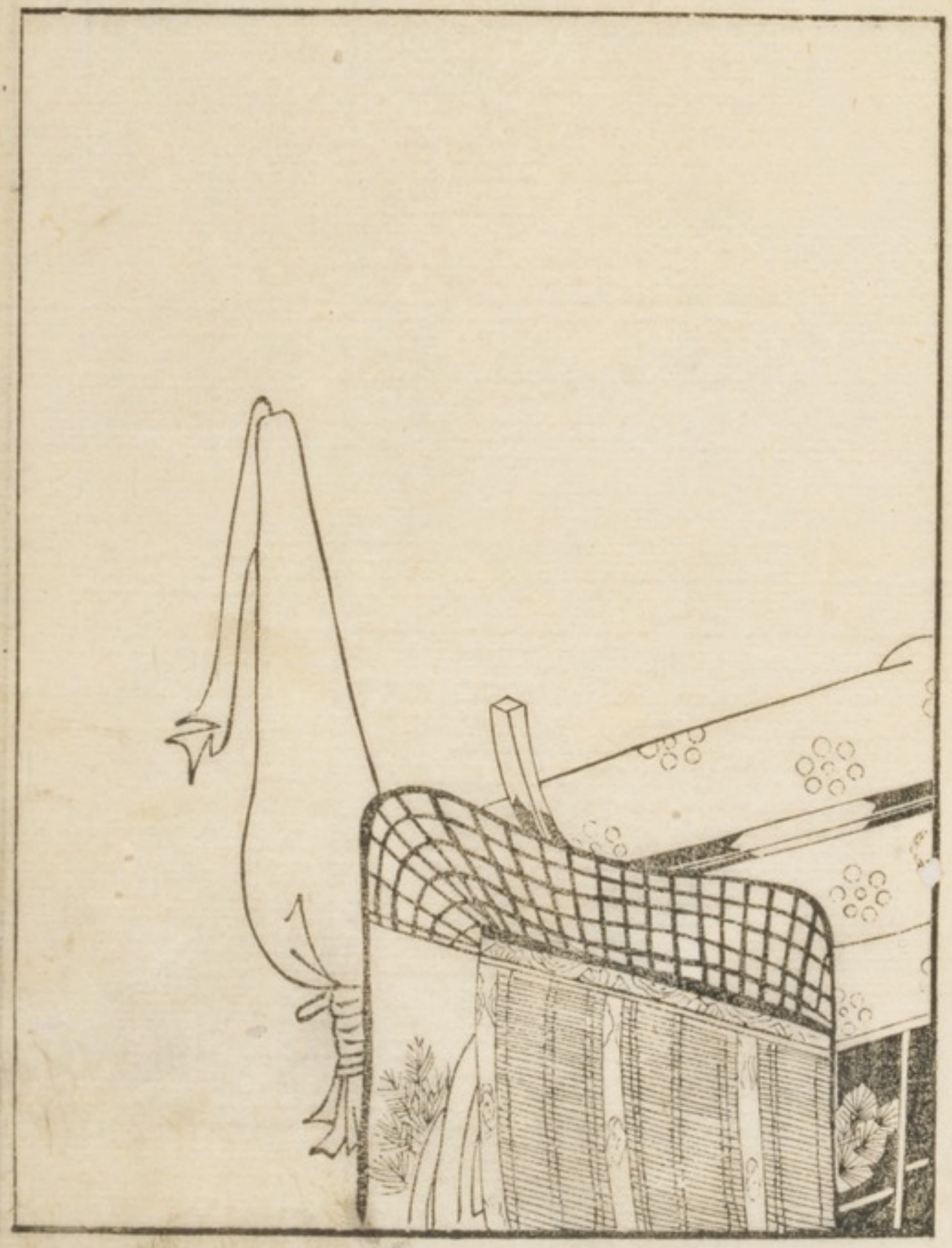
冷山院壽仙　　俗名　古山中平九郎

五月十五日

下谷　常在寺

和推

帷子よ部よ六位乃色の主



享保九甲辰年
心譽深空
九月十五日
山宿 九品寺

俗名
柚岡政之助

山夕

秋を老歌詠ぬ小町旬りきり

享保九甲辰年

智照院蓮心日境　俗名　中村竹三郎

十月廿四日

牛嶋　妙玄寺

琴哉是さしるを知る

壺月

弾

竹をちらく雪は調へや霧聲碧

享保十乙巳年
法山了水
正月九日
淺草称往院中
良狭菴
俗名
深川小晒
安長

鶯や又塵無僧の小簾

享保十乙巳年

相譽一應理圓　俗名　三升屋助十郎

三月廿六日

深川本誓寺中

清心院

超波

口先て狂ひも淺黄茶の雪

享保十乙巳年
聞法院宗信日受　俗名　西國兵助
六月十日
谷中三崎　長久寺
菜々畔の鄙ハ無五郎ゑ
其の句に望ふすのまゝ　訥子
[illegible]ハ〳〵[illegible]も烏帽子反稜

享保十乙巳年

心光院顯理日耀　俗名　中村傳八

十二月五日

谷中　盛泰寺

貞山

戯（ザレ）て世我一休も楚の冬木立

享保十一丙午年
證譽哲吟
十一月十二日

俗名
市川子團次

淺草
清光寺

若武者哉惜む

女
翠扇

葱
[illegible]乃上が[illegible]

享保十二丁未年

覺譽成安

三月廿五日

增上寺中

花岳院

俗名

筒井吉十郎

沾山

茂咲や又南方法無垢舞臺

享保十三戊申年

釋玄覺

五月十一日

淺草

門跡寺中　敬覺寺

俗名　水木冨之助

星合十二段の牛若

芬陀まゝ影

三笑

人形の殘る源や五月雨

享保十三戌申年
喜見日顔
五月廿日

俗名
嵐若野

谷中瑞林寺中
圓融房
風葉

声この事を法具（ヒイキ）頁娘郭公

享保十三戊申年

本立院道源

六月廿日

谷中瑞林寺中

俗名

庁山小左衛門

是立房

薪水

結ましたや庁山の[illegible]

享保十四己酉年

曜譽義顕

正月廿五日

深川本誓寺中　齡閑院

俗名　市川門之助

うこうひるりしも会佛すれハ
往生すてもいたれきり

蓮之

あれしも亦さふとし法忌如門之助

享保十四己酉年

了外宗智

五月五日

俗名 古村山十平次

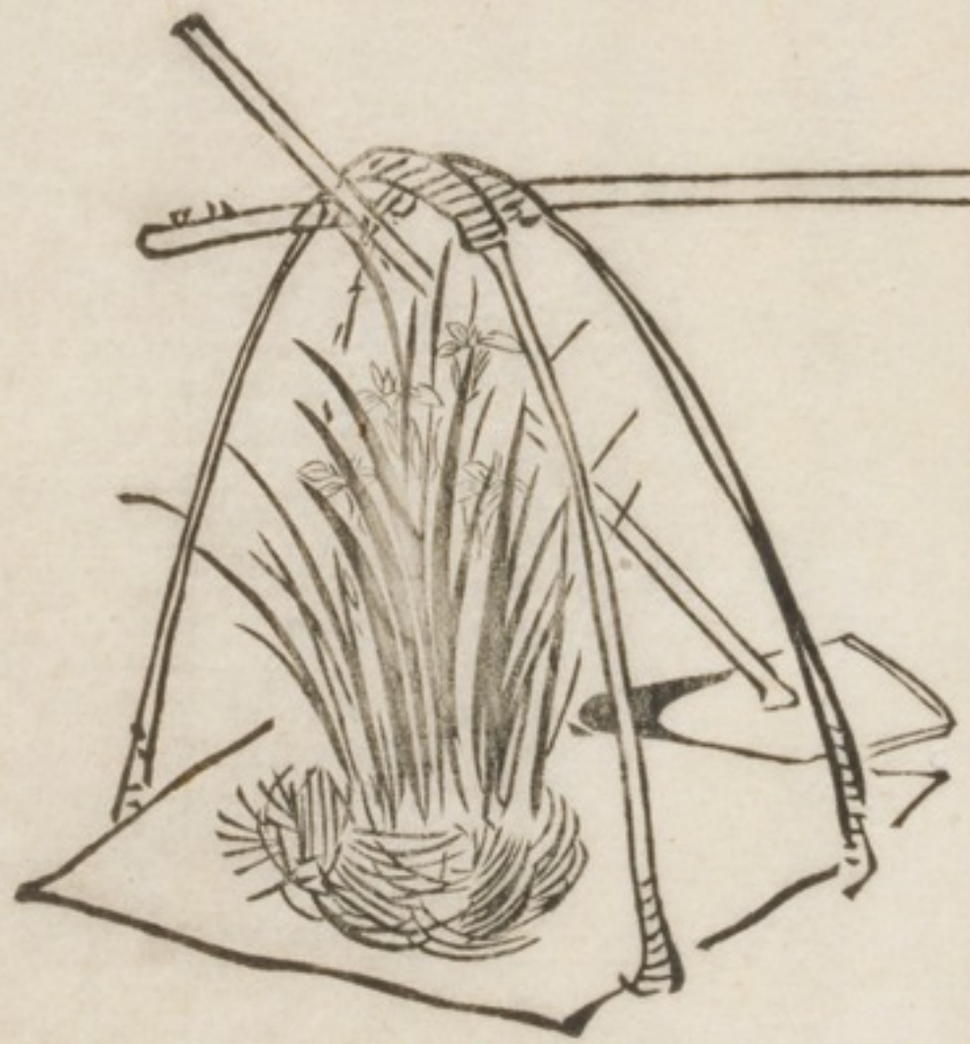
今戸 慶養寺

兄十平次落髪して

宗智と改む

圓推

十徳の西楚明るき花何やめ



享保十四己酉年

秋月光運

七月十二日

増上寺中　威徳院

俗名　出来嶋大助

大妙ハ長壽のことゝ所に
訓のまゝ大地ハまたの明き
其法數と成ぬ

五舟

朝靜の垣も望まるゝに百六ツ

享保十四己酉年
至岸院松縁
八月十七日
浅草新寺町
本立寺
俗名
山本松三郎
白翁

惟光の股ぞちまちや蔭別時
十七夜

市川竹之助　桑原長五右衛門
袖崎縫之助　松本四郎五郎
尾上袖之助　篠塚新平次
藤田平藏　西村半九郎
荒川藤左衛門　松本善九郎
大西森右衛門　市川源七
藤田十郎兵衛

右十三人共戒名年月哉詳不出次
仍て俗名を顯し古人雪中菴北
句をそれとくけ七人を出ぬるふ

嵐雪

蒐柳や
皆ぶあく
出
茄子
あへ

右六十六葉
英一蜂画

贈覺榮居士二十七回忌

法莚一章二句

きけらしや死て朽をぬ花の下

ある僧の云日本に市川團十郎（スウツエンドハンシラン）と
いふ力者ありや中華にて商舶
来往に真画を傳来りて見侍り
と長崎より来る文画之見ハ古き
矢の根五郎成通し女の名を継
て他の名を以て訂かするを未曾
有れ参詳比數孝子成哉

木者菴　湖十

冥加あるを手向に摘もぬき自在

と鶴うまし世に咲るといひしハ鶴顔
あるハ牡丹の御稱を

玉鬘の霧に見て寄しむ大根　永機

審言我感をぬものや梨子の葉　露柱

一と勢上京の比をいひ出て

江戸部乃四条やむしし春の雨　月下

一霞蜃乃吹ク舞屋かも　郁文

土藁の手向とし鶴るや流れを詠　古井

涅槃會や琵琶て唄へハ耳たまち　蓮谷

熱る坂慈嘆深し前も雪　東里

光塩おらきお墓あ里照り椿　立此

芽日も二十七年三葉芹　賀鳥

嗟呼男風も彼岸の匂ひ　拾翠

寸牛居士の老を忘さいきむに人牛
倶ゝ忘まこすこふるを追思して

廓庵の牛ハ本来雪解哉　晋如

光めおおりろ影あ里十九日　圃盛

今も名をかやハまられぬ接木壺　市南

蝶飛や土器冷き洒き蜜　魯文

あきらふや彼稲妻も不破の関　青壚

涅槃よさ込ム叢るれ祖師迄り　毬香

そこても百囀さや名の誉ま　沿ア

福を追ふてきるや右梅乃時　仙里

序舊

云草や涅槃へはえぬ孤れき　川楊

誰も知ル川乃一字や彼岸舟　調柯
菓子あも花まひすや伽藍石　維帆
すへ里見よ尾越継鷹此音不作　橘下
彼岸の様名なし初祖達ナ　孚泉
三姓津の扉風ゆ可得涅槃像　銀枝
天上姓果越見よれ巾姓紋所　佳節
神へ汲雪姓流也も手向可如　素泉
今ハ昔時宗男毒姓取粉　周雨

智恩院の一主様やさの手向　五絃

追思

法乃門柳妻して妻仏杏　魯石
彼岸姓めんく乗屋花可吹　文鴻
獨幾碁盤枕ゆ涅槃像　其後
詩ゆや常照院ハ茶姓先　片門前　即龜
殊る名乃都卒ゆ寄しれ巾　徳宇

婆婆即寂光の文ゆよ里て

今も名ハあて紫根海苔の雲　羊素
見しや昔桜ゟ一唱水の音　黒已
年古し忌日桜ゟ撞ゟ声　其蒼
俤や捨のきたしゝ支の中鴻屋　起風
陽杖法く語ゟ芽立や成田原　琴松
殘す名ゟ達を人や涅槃の會　芝帆
彼岸へ游ばきりゝ舞臺際　千露
涅槃會や追ひ所がなおいる　丈國

作善

草ゟ芽や彼岸しく乃世の囲向　林山
関帝ゟ會座も彼岸の木屋割　峯叔
蕨とや志ゝぬ田舎も指を折　秀我
くりこへ次を空海き旬ふ宿の梅　柳絮
見も法坊主ゟ志ゝる五加木哉　閑水
偽吉て義ゟ里仏事ゟ割獨活　音雪
當東門け中日乃法くゝ事那　沾涼

二十七回忌とふ人のもとへ

門ひろく参詣して入いへとも
法のりの花の法のふ法莚に　桂里

さくも経おもふを松次いあし一哉
あはれふ露あふへ次春風　釈覚海

かきみあとたよるやんのとへはらん
梅るもと嶋端あ句ふ梅か香　釈泉阿

きふハ経きのふ乃露の玉ゆらに　釈雲蝶

むすふむかしの人のおもかけを
あちこち世哉七もとを過ぎて
きふ法法の花や咲らん　義韶

長うき　沈詳

呉竹の　世ふ変えぬ　世の人も　親さえ昔は
春乃夜　水ハ海にて　須磨川　法のなみたれ
悲しきれ　かみさの更ハ　紅手も　面影残次
梅の香哉　吹はへ出る　家の風　弓張月の

みそらにも見えはせて更にしぬ流れの沖ゐ
あふ人をこのま波やかそふらんあはれともへと
夕への名暮の参まここそはきゆる時なき
日枝の山をはなれ年の雪の上に幾七と世哉
かさ山ほわかる法のうち出ハ終ぬ佛乃
法の山より見ぬの国に係新ゐ幾たちとそ見ふ
一面せ伝えたをてらしそへは

追福

常のや続き続枝先ん年手向　浮葉

らせかの二十七歳漕離ま　水光

同

香ハしき草懐盛りや消えて　全央

大ちや人の出てとの帰り行　沖井

手向りや初霜の不破羽織　十雨

雲に左二十七し千代にその名を残す種　佳丁

山の肩あくうちに晴る雪解の郷　常仙

追悼

世々朽ぬ金殿ゆゑ佛の座　暁雨

志やくるものすもともに天人　三外

湊へと入おの帆乃長深ゆゑ　車声

追慕

五箇

こゝろ数やいはのの綱へ手越土筆　沾葉

生成の数や不幸の老の二月　塵人

女歌仙の伊勢北方捕呼子鳥　岷江

猶夢四老の二ヶ月も滝乃沾　汲湘

耳ゆふ遠目に見むりしを能罪瞳　黄鶴

傍そ立華ふむかし板木几巾　栖鶴

松明を極ゆ男世のあのし　沾耕

なへて世乃ち鶯もひきゝへる　李喬

墓

覚栄信士祭祀狂云ゆ前髪

姿哉覚えて

むかし絵や二月の雪持一遍里　以席

辞出ばやあしも于公ゆ門蘋　石魚

梅の香ゟ兄(エト)ゟ指もそも寐覚　照仙
雲すゝん彼岸ゟ法ゟ雑乃雨　文石
謚の這ツ子も指をいゝのお里　桃億
二ツ子も口哉開こはゞらゞ　一舩
彼岸や梅の名ハくもも日和風　撰居
子としてハ香の物引ヶ手向梅　阮志
麿墨ゟ秋ゟ巻ゟや筆防風　露月

追善

名哉呼へハんとゝ来る二月の井　正与
菜ゟ菜や日和七日ゟ法ゟ種　東閣
お里ぬまて名こそ長蓂荻うど蕨　藤里
色くの善ゟ綴引ヶ玉柳　中和
お孝の種菜や墓ゟ菊　三同
梅の書そ花ゟき達へたばこゟ法　折巾
梅の花昆布の菓笑も作善や　左右
ふひおて焼香の奇楠の芽掲活ゟ　尾谷

悼覺榮信士　此一章初七回忌之作也今載之　荷葉

念佛念經顯孝誠　今朝新起幾愁情

墓邊春入苔痕綠　萬里口碑身後名

悼市川氏之亡父二十七回忌之辰　釋　一二三

為呈一章

二十七年遇忌辰　濺花淚雨武江春

衆人皆謂父如在　孝子名高名實賓

追悼　三江

英名震四夷　技藝稱衆奇

嗣子非群器　繼基不可疑

謹祭故才牛居士廿七回忌辰　東海子

往事淚痕春夢回　戲場獨步棟梁材

胸藏風月功名重　勢擘山河雄辨閑

二十七年埋玉樹　百千萬劫坐蓮臺

誰言君駕白雲去　關左至今觀異才

悼門譽入室覺榮靈廿七回忌　五舟

中興冠一藝　入室覺榮名

非使忠臣感　實揺孝子情
梵音黄鳥静　法味白梅清
二十餘年古　吾徒隔死生

遠忌

過去や親和梅花諸哉継キ　詞言
行水のあ里ほまハ為き秋菜ハ　丁固
最も遠なり是も法すの乃大蛙　翠石

升ゆるし家鶯の意をこふらぬ
とてこふ鳥の声も変えぬ山も屋

へあさ使の射るのごとく事きて青坂ハ
弓まらへても猶あくまじ文云也
甚真水同門叉魚かたゝありて共に
一涙を添ぬ

減墨今山谷　楓江
塗紅古市川　叉魚

と漢和水作里し後の人も又我
業をして後の人となりしあらぬ堂の
春哉知る沢

粘賣ハ種まく名ハ寶雅也　喬谷

そのまゝ水

山様なのゝ佛を云出しぬ　乙中

柳の井同し土中にむかしぶ　初立
鳴や鳥ぶむ[illegible]も梅の[illegible]　叉鱗
梅の香や彷彿として[illegible]飛　涓石
梅櫻[illegible]むかし　初茅葉の[illegible]　殘杏
散とても[illegible]ハい[illegible]も[illegible]の[illegible]　松風
照り柿の素袍[illegible]き緋の衣　囀々
[illegible]や世[illegible]書[illegible]に[illegible]梅　矢滴
菩薩[illegible]も孝ハい[illegible]かつ[illegible]　杜人

巌浄の[illegible]の[illegible]れぬや梅住居　雨塊

追福

児同乃滝に不動のお[illegible]石[illegible]　松羅
船[illegible]や二十七里[illegible]彼岸[illegible]　角調
江戸看板の祖師[illegible]十九日　桐橋
[illegible]や鄒縣[illegible]町　竹止
名木の株[illegible]や彼岸[illegible]　友以
慈とハ月蓋長者[illegible]供養　河東

志きぬや古木梅乃三九年　推東一

百合若も云へ海苔の里乃衣かな　橘中

衣更着や涙も磯志蝶香　山壽

二十余年々葉すゑを独居時分　呉丈

悼舊

菜摘花や亡しハ名残の評判記　逸志

涅槃会や備堂あまハ花こ和有　来尓

名や志るき彼岸ふかる真根栽　嘉齋

阿羅漢乃影せゆかしき梅の花　乙磨

手向とや名のこ香しの摘菜　三中

鐘の声ハ清ほと櫻ふ訪きけり　夕丈

南はらくに無し阿弥陀世やぬゝ陀　文之

王氏ゆかしきても嗅ぬの二月梅　蘭洲

慕遠

〳〵名残童乃ゆかしに衣更着や　榮業亭　冠子

きさらぎや涙手向けの笹乃毛　藤橋

名ハ高き梢の菊や二十七　白羽
稲素姓元祖羽織や彼岸雲　圓推
彼岸咲樓井の書や此二冊　三笑
享保十五樓もいせ多法の市　冨百
兵姓厂姓名残し和粉の剥毛　里郷
末法ゟ此志を繋る詔を接種ゟ　宗之
大太刀ハ鞘へ入日乃彼岸ゟ如　楓晩
和毒やう浦法ハ都も閑伽の水　喜者

唱えへて菊も口明ゟ手向の那　潮雨
嗅て見よ三升の祖師の梅衣　倍子
日和哉是も師の乃彼岸乃　銀翁
菊佛ハ都まてをしや涅槃像　少長
法事此家を存ぬるに成田屋とりや
阿弥陀笠ハ成田でも惡ん田うち取　故一
三年改めぬハ孝の乃二十四番の風吹傳
ゟ菊の詔当香ハしきを数へあハせて
父の乃ハ菊姓数吹年回向　何江

買方堂

くて当ちや年々巣々手向物　何龍
穂替て二十七年庭はらう　何文
雨と変彼岸撰もまとハとて　沾津
アザ青二佛も名のミ春の夜れ　古洞
彩色乃一巻繪ニ那東福寺　几杖
みとり子の志ろ手本やかつら草　水平
むかしく草と枚葉のそなへ物　朝荻
替る世や六条通ひ彼岸乃　涼市

拂散て撰ハ譲る江戸家ニ有　英子

遠弔

春くるや五十四遍の夜彼岸　桃朝
偽へ来てくれ三升れ江戸撰　我常
法よくして茶ハ色を立ス根来椀　五粒
春夜や晴ハ傘の法来迎　笠子
月ハ残る来枕か当し春れ夏　帆夫
春夜れ緑ハ名をうそ誉繪る　珉水

彼岸へ彼篠塚の追風かな　是歩

猫妻や雪ほろ百哉ゆる广　巳十

むかしく種蒔人の外目哉　雲什

戊午春三月亡父ハ膠漆の友なり
忌日忌日もことしに二月十九日之

初春や月と我の日も昆号鶏广　十町

あの人や二月の茶れね杉縁起　薪水

招く枕公平本も涅槃の卵　杉暁

素枕のあまやこゑへ縄簾　八町

光陰ハ野毒我句に筍むる里　琴助

我の花ハ下戸ふ強そう来開ね　魯凡

その年ハ遅漢の涙十九日　竹旦

人俤しもの空そすゑ梅椿　冨八

彼岸ぶ昔哉語るむかし人　尋山

世ふ惜む句ひやよふ三薬芥　五帆

歳甚の以小雨西ひ旅也花　瓢下

名ふ咲やも向の花のあんま　岩久

焼香やむかしくの旋き椿　一翁

彼岸風呂ハのへ浮護判師　萬水

若乃や志はらく法の了き　貝錦

世帳ハ世本志遁る帳面

名を留よ大福帳を蓑き蝶　詠子

懐古

衣更ゑや絵て見る都の志にハき　文雄

年も日とこく慕添て柳ふ　鈞雪

耳塚知ル者の日梅もん恙　芦洲

紫陽雲へとゞけ也山まかび　玉声

行道る形や流るゝ乃墨衣　菊文

鴬囀や翁我を読の姉さま　文糸

妙音の歌之妙あ里雪解川　沾車

名ハ花ちゝぬ二月九稍ふ　路光

法の日や立とりく也鶯菜　紫苔

散て後樒ともなする椿の花　一之

茶あまいはすかはち入りぬ門破里　郁水
けるより降りそすらめその二月　初朝

歌僊

柳なく茶なし洗くしのを秋袴　三升
二十七年めくり衣更着　十町
てらくゆゑ洗ためふ燕すくはまして　訥子
板子哉揚ふ投てやりけり　五舟
雪ハすぶ戌亥ハ殘る雪の月　沉詳

ウ

破しハあ御のやすむ黒核　故一
鉄眼て獨て角力取習ひ　十町
泣子を連てゆゑ哉始ませう　訥子
西方此女をこ入とハ見られとも　五舟
詠ぬ波と川嶋屋掃　三升
身応し犬ふ逸ハぬ哉益にして　故一
女の声て唵阿謨伽吠嚧　沉詳
千夜が声ありけるる逆ぎり月　訥子

鳥ハ雲のきくたずりや　十町
篤信ゟ長生盟授きらき　三外
我きハ陰千見ハ壷漬　故一
横ゟハ雑あらさしの喰ひ迎　五舟
池あらら鳥ゟ覧永の表　沉詳
名
蝶二ツ妹の洗ひし竿ずくミ　故一
髪を詰ハ次に居てもびいどろ　三外
そこもとの藝ハ栄螺の志つぺぎり　十町

ゟの了管ハ雪隠てせん　訥子
端のをの横ゟ手をはく郭公　沉詳
松もむのし此國姓爺頌　五舟
鰯りとゑへを塩て足のうら　三外
玄関へ殿の糠ハその分　故一
衣きはのよい行ゟる産以の坊　沉詳
月満々と水の境目　十町
観音の化身なるよしおほき萩　五舟

殘

暖簾に鈴をはせて小田寺　訥子

切火にて老に何てうふ稲荷飯　十町

祭日の手拍筑波うら鳴ル　三外

殘すべも志らて居もなく弦おさ通　訥子

鍼て活をぜ寄らく一僕　沉詳

打茶に衣の袖が皆かく家　故一

此の佛辨も十九日拭　五舟

華洛

其角例の法を繪小才牛ゟ鍾旭の所作を画圖す孝子三外姫すくひめをきしら予に他事なく語里て此を見をしむらさし達忌にあやりこれを向の一章となす

化笛齋

世に鳴し鍾旭姓笠ぬいの洞里　仙鶴

此灵哉其の名都鄙に芳しらさし三九の祥忌にその芸哉述事冥福を占ふものなりし

九天に訪くくや三ッ忠茶車　寒屑

之地の屋むむすし語里也聖灵會　芝蝶

初ぐ支ぶ打ねてハ松ぬとゝり立　寸糸

名を石に殘して

旧苔哉洗ふ涙や雪まん杲　可幸

老周忌のよし故へ申あしるに

洗のハし侍る

こやいはん花ゐ芽ゝえて命乃葉　紫野　敬雨

周賣比奇をこのまんと手向侍りしハ

むりしなりけらしてまた三升孝子

七爺三九此老忌哉追善して故姉

空まても誹句を索めしむまに摂取

不捨の金文あるもかなひてんや空

感涙を袖にこめて

九不や三縁山姉さまさまの姓　掉歌齋　信安

三升子の七父哉こふらぬて

紫を石あて見るや春乃草　金毛

追福

かき詠ふや和田藍此椽姉板　水色

にもつて長頁手拭涅槃の那　如皐

名を接まや其まゝ七光利　蘭室

汝の父ハ有ふ雨ぬ玉此花も吟し　松峯

浪花

難波乃梅りのをあけまに手向んもいと
さるのなれと去此不遠とのいへを

十方乃ひ可星我三升茶鏡　黄玉堂　里虹

茶市川の主其頃の獨而して世に鳴す
かな星なりしと其茶不作の龍ハ和梅
々に枝葉ふ法のへ茶うるハ志う咲当
志らぬいにしへの人を志らひて

春夜に むかしの絵姿根問をん　芳澤　春水

亡主此洮名を才牛と呼ハ五十年
除以前七夕の狂言に

牽牛　市川團十郎
織女　伊藤庄太夫

此時よりと傳へ来て

きけらなやむかしの星我法ら称歌　長谷川　千四

市川の何某親に劣らぬ其の頃の達人と成て
七人の二十七回忌を一集に顕すと来て

其の種の照猶はよし和粉薊　賀子

市川氏其七回忌をこふに上手えと
世にかハ四りられしを実に吐

藝のたれ今も世上ハ花あく話　吟松亭　里暁

凡をたゝやな親にも二月風車　寺田　耳霖

そのそ二十年余乃萬に風　松田　佐國

追思

千代のうぶ（野）籠りけさせて梅乃身　竹田　卜童

百里来海せる文ハ芦の芽　三升

切ノ姉強き習ひ母もとゝ海りて　翠扇

遠忌

其の臺粉も落さん蝶の夏　南都　梅七

萠麻姉中にその名やうぜほうし　白河住　室奥

そなふるも光陰の矢乃三羨ふの旨　吟松

二昔ちやきさらなや十九日　鴛子

初霧姉手向と明るやおほんの名　玉宇

虎杖や石山源を比数なし　菊人

元禄七甲戌の年亡父才牛京師に

寓居せし時御影供の句あり今

幸に追悼一集姉寒末にあまた哉

載旦夏秋冬の句を加へて四季乃

遺吟をしるす

御影供

十牛

清玄石しし
油を如く世
美の風

伊勢物語

才牛

烏帽子着て
遠くも
由のしし

草
いされ

十郎慷慨愛於鬼
血氣武人犀甲軀
妾婦當時誓星否
隕成此石似望夫

かくれなし　十牛

秋海棠　虎法苑

十月蟋蟀

入我牀下

才牛

志ゟミ清く

黒子や

牀の

きまく次

松口唯

龍[illegible]

追悼

我の梅ハ散ても青虫のかさしぶ　笠翁

歌仙

こひ井手結蟻鶯　念佛哉　蓮之

牙舎利ゟ箸の薪納豆　三外

鼻利ゟ月夜の梅哉折頁ケて　仝

芝ゟ寐おろ姫人に春風　蓮之

かい志きれ下戸も旅ゟハなりすり　仝

時雨も庇霰も庇　三外

ウ

よい格て命松丸ハ有法のまゝ　仝

匂ひ袋哉狆くハへ出る　蓮之

玉ゟ瑾痞血結みち里かちゟ　三外

母乃声ゟてあまゝ寝なし人　蓮之

深川の地蔵菩薩ゟ志くハなし　三外

鶉部笑ゟ夏のあくる日　蓮之

月影残る名のミ浮橋市庭篝　三升

髪へ一炷ご焚るお角力　蓮之

蒟蒻もなふて叶ぬ娑婆世界　三升

座以の年ハあだらいかり嵩ル　蓮之

元日ハ手澤存し花乃軸　三升

下手寳引の腕の強けよ　蓮之

名

長宗さハ方孫婦る人の縁かしら　仝

る蹄らぬ日ハ家ね巣むし　三升

嫌ふきて喰亥女ハところてん　蓮之

子れむ志里へと急きゆ　三升

年まかりするも寐られずき里に　蓮之

海の宮比戯ぶふき川一　三升

けさ松も手傘ほしおハ秋の空　蓮之

熟柿ご銭を借りるみ柿　三升

亭形のう照月戯ハて善光寺　蓮之

吉祥天女ぢやまも云ハまぬ　三外

忘る那よ炬燵で裾を焦る半　蓮之

大乃木のこれ同へ乳をさす　三升

ウ
油屋のをりしかり里　光和雪蛍　蓮之

賭に敗さうなれハ鯉塚　三升

お袋へお袋かゝ結　恵をひ　仝

逢ふとうつふく十九二十又　蓮之

頼もしくお家ハ残る花の姿也　仝

散志ばのなる極楽ハ雲　三升

吊故才牛辞

孝子悽愴の意ハ春秋霜哉履ハ謂ふあゝ所
茂乃雪を踏て少年老夫男女をいはれ同しく
惜こしはきけらず十日何まり九日といふまれ
ある春秋あし其周忌年回毎に三升父の
家名哉起して既に二十三回忌に孫子升ハ初
祖父の追善とて覚らしきせり姫の流まつきなきに
実佳名に服那支魂ハあ海かけ里てやよろ

さひ出ほひなん其笑語聞あとくなる為し
なを其嗜好をたゆふに今追悼の秀吟 詩歌連誹
我集て好奠するに其心至もりおもし父は
難波舊徳の門弟なれとなり才牛は其表徳之
父は十蔵 法名浮喜 母は妙壽其先総州播谷
村の富農なりく堀越氏とあやしきなる十蔵
耕収の業我嫌ひて任狹の義我重し肥壌の
総州を去て其弟に譲里繁華の江都に来り

住まり時に萬治三年庚子和泉町にして
才牛我生めり童名は老蔵幼より性妓藝に
ちとく周て妓家に入て市川園十郎と称す
父任狹の勇氣を更て荒事といふるの為我
開き里紅粉を以て遍身を塗三升乃禪の
大太刀日の丸の小さき扇其比の離れ云我
時代狂云の續キに仕組大あらりとも是を
事皆才牛より始まり實に藝中の太祖と

称す為しさて世に賞するの諸物には五年
此大太刀三升の鍔を本らし一枚繪製法
蓬艾唐錦此華級に三升あるを其名
唐土の機婦に及へ里邊鄙の嬰児までも
園ナ布をよゆくいへ手我揚口を明り年を
知るかく和漢に知らるゝ父の容貌を在す
とくゝ見る事親に似るてに楽度此大鏡
ゝに父の手澤存するに其遺體我年此

矢乃根に應なて曇なき事わすれ居るの
孝情なり此孝情固る所如しし才牛此至
孝ハ既に世に知る所也浄喜をし楽度に
来れは履物我待次迎へて手我引機安に
あ給ひ髪結ひ而て怠倦我問家に在ハ
出入必面して目々に寒暖を存ぬ故に又
他人敬し重する事多ゝ里しかや是
才牛の敬養至れる故也三升又父我慕ひ

今まとに従ける哉恨むといへども幸に
慈母の存する哉喜び青々者莪を廃ぬ
とや今三升志哉継キ功の成ます哉褒し
追慕の孝情を感する事にかをの流る問橋の
笑ひをうくるなるへし事ことや一句

大利乃むの里やせ志也の此一ト[illegible] 摂取 辛夷 桐葉園 白翁

苦菜もすてぬ雪解汲沙弥 不捨 三升

霞半洗菜筆書持 廣也事 文壱

追善

蓮の根や納家家も經机 白翁妻 吟枝

小弟樹もせふ乃手の内 女 翠扇

若雀喜持毛衣美姫くまて 女 市櫻

追加 梓工過半成之後到来仍載于此

壱忌二十七年 傍 猶嘗時に

有て万民見を賞歎次

茶あさみ成田不動哉乳兄身 京 巴人

右

追福の佳作凡三百余吟ハ実ニ口称念仏に
等しけれども歓喜踊躍して古の一集を
霊前に具へ且又俚句を列て二十七回
忌辰に結願の意を述

佛とハ氷平風持和訓の郎　三外

嬉夕巻

先考市川門蔓入室覚栄居士ハ椎本
才麿門に何ひて老牛といへ里其一子
九蔵の時よ楽ちすし持天持稚をうけ
ゐて寶井其角の流に上りて三外と名
乗ホホより秘花をしを年何里没故
谷歓堂に親しき姫のよそ又久しゆ
てに父の行状をかたひ莞爾として歎哉

供事は此之云にあらり居士とし庚戌春
きけり於十九日二十七回にあらはむ為事
俳孫乃句にまゝけて歎佛八十八礼結
瞳にはまさて外五郎成長をとり行世
數申れて我孫は乃爲翁詞家恵之
江都行輪梁安叟古

享保十五庚戌年二月十九日

一葦岩五舟採筆

彫工 大久保一富